沖縄戦61回目の慰霊

激しい地上戦を体験した沖縄。犠牲者を悼む「慰霊の日」を23日に迎えた。沖縄戦で司令官を務めた軍人の遺族たちは、戦争の悲惨さを継承しようとする人たちは、戦後61年の今をどうみているのだろうか。

（佐藤拓、伊東聖）

司令官の遺族 思い様々

海軍壕公園資料館にある軍服姿の父の写真を見上げる大田豊さん。沖縄に来たときは必ず立ち寄るという＝沖縄県豊見城市で、金子淳撮影

遠く那覇市街を望む海軍壕公園。沖縄戦で海軍の拠点となり、一帯で約4千人が死亡した。この地に今月13日、遺族ら約90人が集い、祭壇に花を手向けた。

大田豊さん(61)も兄姉とともに参列した。61年前のこの日、米軍の猛攻撃で敗色濃厚となる中、この場所で自決した父を思って黙祷した。

父は大田実・海軍少将。沖縄戦で約8千人を指揮した。自決前、海軍次官に電報で県民の献身的な協力を伝え、《沖縄県民斯ク戦ヘリ 県民ニ対シ後世特別ノ御高配ヲ賜ランコトヲ》と訴えたことで知られる。

豊さんが選んだのは、父と軍なる海上自衛官の道だった。「誰かが努力しないと、平和は守れない」との信念からだ。

沖縄戦の資料を読み、圧倒的な兵力差を知りながら戦わざるを得なかった状況を知った。日本軍が乳幼児を含む住民を殺した事実にも、戦争の厳しさを実感した。

「戦争は悲惨。子や孫が悲劇に巻き込まれないことを願うだけだ」。海軍壕公園を駆け回る2歳の孫を見て、改めて思った。

東京の小学校教諭、牛島貞満さん(62)は26、27の両日、豊見城市の長嶺小学校に招かれ、平和授業を担当する。テーマは「牛島満と沖縄戦」。

沖縄守備軍約10万人を率いた牛島満・陸軍中将は祖父にあたる。最後の激戦地、糸満市摩文仁で6月23日、自決。この日、日本軍の組織的抵抗が終わったとされる。

沖縄には、なかなか足が向かなかった。20万人を超す死者を出した沖縄戦の指揮官の孫という立場が、心を重くした。

94年春、初めて沖縄を訪れた。摩文仁の旧平和祈念資料館に行くと、祖父の最後の命令が展示されていた。《最後まで敢闘し、生きて虜囚の辱めを受くることなく、悠久の大義に生くべし》。この命令で多くの県民が命を落とした、という解説に衝撃を受けた。

「子ども好きのいい人だった」。祖父を知る人々の話と、多大な犠牲を強いる命令を出した司令官の姿。調べるほど、二つの像はずれていった。

「天皇への強い忠誠心が、目の前の住民を見えなくさせたのか」。教育がそうさせたと思うだけに、国を愛せよと取り立てて教えることには強い危惧がある。牛島さんは思う。「愛する相手は強要されるものではなく、大人の姿を見て子どもが考えるものだ」

若者に体験継承、苦悩

売上高で沖縄一の書店リブロ・リウボウブックセンター店（那覇市）。出版から約1年たった今も平積みされ、毎日1～2冊は売れる本がある。

漫画家小林よしのり氏(52)の「沖縄論」。同店で昨年、2番目によく売れた沖縄関連本だ。

小林氏は日本の先の戦争を大東亜戦争として肯定し、「公の回復」を説く保守派の論客。「沖縄論」では歴史、文化から戦後の米軍占領、本土復帰まで幅広く論じた。米軍基地の固定化を是認する政治家を「親米保守」と批判する一方、県民には「日本の安全保障に対しても主体的な思想を」と呼びかけた。

リブロの店長は「幅広い年齢層が手に取る。共感か反発かに分かれても、何を言っているのか興味があるのだろう」。

沖縄県宜野湾市で昨年8月、小林氏の講演会があった。ホールを埋め尽くした約1300人の聴衆を前に、「沖縄は『平和は大切だ』で思考停止している」と指摘した。

「郷土を発展させるには郷土愛、国を発展させるには愛国心が大切だ」（10代女）。会場で回収された約300枚の感想文の多くが、「感動」を伝えていた。

講演会場には普天間朝佳さん(46)もいた。沖縄戦でのひめゆり学徒隊の足跡をたどる「ひめゆり平和祈念資料館」（糸満市）の学芸員。基地撤去の主張や本土批判も交えた話に「沖縄人の共感のツボを押さえている」と感じた。だが、若者の多さに危機感も覚えた。

入館者が書き残す感想文に、展示方針を「反日的」と批判する内容が目立ってきた。「少女たちは……兵士たちとともに死ぬことを願っていたのです」（27歳会社員）、「軍部が悪のような説明書きはよくない。ここは左翼人間の生産工場ではない」（22歳学生）。

「戦前の教育の怖さを伝えるのが館の理念。でも、証言者が年々減る中、どうすればリアリティーを持った体験の継承が可能なのか」。普天間さんは悩み続けている。